

海岸清掃を機に作製した新聞紙レジ袋が住民の行動変容に直結

環境大臣賞 福島県 只見町立只見中学校

日本有数の豪雪地帯として知られる只見町は、雪がもたらす希少な動植物の宝庫で、豊かな生態系が育まれている。その自然環境を守るために、ユネスコスクールに認定された同校では、地域とともに多様な取り組みを実践している。中でも注目を集めているのが、新聞紙をリサイクルして生徒が作製した新聞紙レジ袋を、地域の商店がポリ袋の代わりに実際に利活用している取り組みだ。主に昼休み時間を使い、毎週 100 個ほどの新聞紙レジ袋を作製。作ったレジ袋は、商店で使ってもらえるよう生徒自身が売り込み、各店舗の在庫管理や発注作業も行う。この活動が誕生したきっかけは、海での体験学習中に、砂浜に散乱する漂着ごみの多さに生徒が抱いた危機感だ。海につながる川の上流で暮らす自分たちができることを考えた結果、ごみで目立ったプラスチック製のレジ袋に着目、まずは地域から減らそうと開始したのが始まりだ。生徒の活動に感心した住民からの要望を受け、新聞紙レジ袋作製教室を地域で開催。他市町村にも伝わり、生徒はイベントなどに出向き、地域内外で新聞紙レジ袋を広めている。その姿は、地元の農家を動かし始めた。

生徒の活動に刺激を受けた「さんべ農園」代表取締役の三瓶陽太さんは、「生徒の活動から多くを学んでいて、私も米農家として、プラスチックコーティング肥料を使わない技術を導入し、日々奮闘しています」と意欲を見せる。その米農家からは、不要になった頑丈な米袋を学校に提供してもらい、生徒はミシンを使って、新聞紙よりもさらに強固なレジ袋を作製。重いビンにも対応できるので主に酒屋で使用、来客からは大好評で、すぐに品切れになるという。手ごたえを実感する生徒は、ブナ間伐材の活用が盛んな只見町をアピールした「SDGs カラーホイールバッジ」も作成。丸くカットした木材に 17 色の色づけをし、SDGs の推進を願い地元の企業やイベント時に配布している。こうした取り組みは、県内外で行われるシンポジウム等で発信し、多くの反響に自信を深めている。

漂着ごみの現状を知った生徒が足もとから見直すために始めた小さな活動が、地域を巻き込む中で、大人の考えや行動を大きく変えていき、町にあらたな活気をもたらしている。



福島県 只見町立只見（ただみ）中学校

学校長：伊藤 知雄（いとう ともお）

生徒数：69 名（2024 年 11 月末現在）

住所：福島県南会津郡只見町大字黒谷字上野 300

電話：0241-84-2022

アクセス：JR「只見駅」から車で約 10 分

上：休み時間を利用して新聞紙レジ袋を一枚一枚作製する生徒たち、2 左：商店に置かれた生徒手づくりの新聞紙レジ袋、2 右：新聞紙レジ袋教室を開催し、住民に作り方を伝授、3：海岸清掃活動の様子、下左：米づくりに使用する肥料について米農家から教わる、下右：SDGs カラーバッジ、地域内外のシンポジウム等で広く発信する生徒